7節 再生していない人々の善い行いについて

7-① 再生していない人々によってなされる行いは、それ自体としては神が 命じておられる事柄であり、自分自身にも他の人々にも有益なことがある。

「主はエフーに仰せられた。『あなたはわたしの見る目にかなったことをよくやり遂げ、アハブの家に対して、わたしが心に定めたことをことごとく行ったので、あなたの子孫は四代目まで、イスラエルの王座に着こう』。しかし、エフーは、心を尽くしてイスラエルの神、主の律法に歩もうと心がけず、イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪から離れなかった。」

# 列王記第二 10·30、31

「アハブはこれらの言葉を聞くと、衣を裂き、粗布を身にまとって断食した。 彼は粗布の上に横たわり、打ちひしがれて歩いた。・・・・・『アハブがわたしの前にへりくだったのを見たか。彼がわたしの前にへりくだったので、わたしは彼が生きている間は災いをくださない。その子の時代になってから、彼の家に災いをくだす。』」 (単)

# 列王記上 21·27、29

「人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めていますが、他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、

ピリピ人への手紙 1・15-18

7-② 再生していない人々によってなされる行いは、信仰によって清められ た心から出るものではない。

「カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を 伏せた。」 (共)

#### 創世記 4.5

「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。」 (男)

#### ヘブライ人への手紙 11・4

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。」 (典)

# ヘブライ人への手紙 11・6

※ カルヴァンは、スコラ学者(カトリック)の功績論を批判して、いかなる行い も信仰に基づいてなされないと神に喜ばれないと言う。

「彼らは善き行いをたゆみなく押し売りする一方、自分たちの良心には、神が 彼らの行いに憐れみと好意を必ず示したもうと確信させようとしない(トマ ス・アクィナス『神学大全』)。我々は真反対で、功績には何一つ言及しないが、信仰者の行いは神に喜ばれているのだから疑う余地なく神に受け入れられていると教え、その教理によって比類なき慰めをもって彼らの魂を奮い立たせるのである。更に我々は、いかなる行いも信仰なしで企てたり着手したりしてはならないと要求する。神の喜びたもうところであるとの確信を先ず心に固く持つのでなければ、そのようなことをしてはならない。」(綱要)3-15-7

7-③ 再生していない人々によってなされる行いは、正しい仕方で、すなわ ち御言葉に従ってなされていない。

「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」 (共)

コリントの信徒への手紙 - 13・3

「こうしてわたしの顔を仰ぎ見に来るが 誰がお前たちにこれらのものを求めたか

わたしの庭を踏み荒らす者よ。」 (典)

# イザヤ書1・12

- ※「庭を踏み荒らす」―単に犠牲をささげるだけの形式的な礼拝は、聖 所を踏み荒らしているにすぎない。(脚注)
- 7-④ 再生していない人々によってなされる行いは、正しい目的、すなわち神の栄光を目指してなされていない。

「だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする 偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あ なたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。・・・・ また、祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に 見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、 あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているので す。・・・・断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしては いけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつ すのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け 取っているのです。」

マタイの福音書 6・2、5、16

※ カルヴァンは、我々の善き行いが、神に栄光を帰すためになされることについて、次のように言う。

「確かに、神が我々において栄光を帰されるためという一つの理由だけで我々には十分である (マタイ 5・16)。神の栄光と言われてもさほど深く感動しない人がいるかも知れぬが、良き業をせざるを得ないように促す神の愛を思い起こせば十分である。」(綱要)3-16-3

7-⑤ 以上三つの理由によって、再生していない人々によってなされる行いは、罪深いものであって、神を喜ばせることはできないし、人を神から恵みを受けるのにふさわしくすることもできない。

「ハガイはそれに応じて言った。『わたしにとっては、この民はそのようなもの

だ。この国もそのようである。一主の御告げ一彼らの手で作ったすべてのもの もそのようだ。彼らがそこにささげる物、それは汚れている。』」 ②

#### ハガイ書 2・14

※「そのようなものだ」―聖なるものとなるのは容易でないが、汚れたものとなるのはいともたやすいことを指す。(脚注)

「きよい人々には、すべてのものがきよいのです。しかし、汚れた不信仰な人々には、何一つきよいものはありません。それどころか、その知性と良心までも 汚れています。」 図

# テトスへの手紙 1・15

「わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。

あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、

わたしは、かぎたくない。

たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、

穀物のささげ物をわたしにささげても、

わたしはこれらを喜ばない。

あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえも、

#### 

# アモス書 5・21、22

「主は彼に仰せられた。『あなたはその子をイズレエルと名づけよ。しばらくして、わたしはイズレエルの血をエフーの家に報い、イスラエルの家の王国を取り除くからだ。』」 ②

# ホセア書 1・4

※「エフーの家に報い」一B. C. 842年に、エフーがアハブ王家の者をイズレエルで虐殺し、王位を奪ったことへの報い。「王国を取り除く」一B. C. 721年のアッシリヤによる滅亡を指す。(脚注)

「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」 ②

ローマ人への手紙 9・16

「神は、わたしたちの救い主イエス・キリストを通して、この聖霊をわたしたちに豊かに注いでくださいました。」 (共)

テトスへの手紙 3・5

7-⑥ それでもなお、再生していない人々が、善き行いを怠ることは、なお さら罪深く、神に喜ばれないことである。

「悪を行う者は知っているはずではないか。

パンを食らうかのようにわたしの民を食らい

主を呼び求めることをしない者よ。」 (共)

詩編 14・4

「自分の目に自分を偽っているから

自分の悪を認めることも

それを憎むこともできない。」

(典)

詩編 36・3

「彼らは神に向って言う。

『ほうっておいてください。

あなたに従う道など知りたくもない。

なぜ全能者に仕えなければならないのか。

神に祈って何になるのか。』」

(異

#### ヨブ記 21・14、15

「それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れさり、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』・・・・そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』」 (重)

# マタイによる福音書 25・41-43、45

「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならないことです。ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません。」 ②

#### マタイの福音書 23・23

※「この7節では、カトリックの異端的見解を否定することが主眼点」と(講解)では言う。カトリックでは、「再生しない人々がする善行は、もちろん、罪の赦しや永遠の生命を得ることはできませんが、恵みに値する功績になることを主

張するのです。そしてこの恵みを与えられ、それによってよいわざをすることによって、そのよいわざが罪の許しや永遠の生命を受けるに値する功績を、働き出すというわけです。ですからカトリックは徹頭徹尾、功績主義、律法主義的です。しかし聖書の教えによれば、人間が罪によって霊的に死んだ状態から、生命を与えられ生まれ変わらせられるのは、未信者であった時になした〈よい〉わざの功績によるのではなく、まったく神の主権的恩寵によるのです。」(講解)また、同じ主旨であるが、(註解)では、次のようにこの節をまとめている。

「本節における関心は人間の功績についてのローマ・カトリック的大建築を破壊することである、ということを認識する必要がある。特に、ローマ教会は、人間は再生の前に、神の恵みを受けるのにふさわしくなっているという証拠を示さなければならない、と教えているのである。換言すれば、人は、救いをもたらす恵みへのパスポートとして働く、功績となる幾つかの行いを持たなければならない、ということである。ここできっぱりと否定されているのは、まさにこうした考え方である。

挙げられている三つの理由の中で、最初の、そして決定的な理由は、再生していない人々の行為は、信仰によってなされるのではない、あるいは、ここの表現では、〈信仰によって清められた心から出るのではない〉ということである。第二は、それらは〈正しい仕方〉でなされていないということ―その意味は、神がその御言葉において、特に彼の律法において、お与えくださった規準に従っていないということ―である。最後第三は、それらの行いは、〈神の栄光〉という正しい目的、目標を念頭に置いていないということである。聖書から引き出されるこれら三つの規準から判断すると、再生していない人々の最善の行いも、清い神の御前にいささかでも功績を獲得することは不可能であることは明白である。」(註解)